訳者のことば

これはリチャード・モーリス・ティトマス著 Social Policy: An Introduction, 1974 の翻訳です。原著が刊行されたとき、著者はすでにこの世の人ではありませんでした。死の一年後に、友人と夫人の手で編集されて出版されたのです。しかし、本書は、ロンドン大学のカレッジである、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンスで行った講義のためのノートとして、彼自身が書いたものです。講義は、一九七三年の春学期に週二回のペースで、ガンの痛みに耐えながら死の直前まで行われました。刊行二十五周年を記念して、ここに新訳を試みました。

ティトマスは、一九七三年四月六日、六十五歳の春に、早すぎる生涯を閉じました。その七ヵ月後の同年十月、第四次中東戦争勃発、石油輸出国機構による原油価格四倍値上げは、いわゆる、第一次石油危機として世界を驚愕させました。先進各国は、未曾有の経済的苦境に陥り、その回復が遠のき成長神話が終焉する中で、公共部門の民営化、福祉国家目標の見直し、そして後退へと具体的道筋を辿りました。一九九〇年前後からは、ソ連・東欧における社会主義体制の崩壊、イデオロギーの終焉、世界の全面的な市場経済化などの激動が続き、彼の死後の国際社会は大きく変貌しました。

もちろん、ティトマスはそのことを知る由もありません。しかし、本書で提起された論点は、あたかもこの二十六年間を自ら経験し、それを踏まえて述べたのではないかと錯覚するほどに、時代の動きを的確に捉えています。まさに、碩学ならではの慧眼というべきでしょう。そこに、時代を超えた真理があるからこそであり、彼の福祉政策研究は、二〇世紀の重要な証言のひとつとして、二十一世紀においても、失われざる光に満ちて私たちを指導してくれるでしょう。時代の流れの中で、世界は大きく変わり、ティトマスが批判して止まなかった福祉の民営化が現実のものとなったいま、私たちの軸足を定めるためにも、いま再び参照すべき必読文献であると思います。

この資料は、立教大学での私の講義「社会福祉の近未来」及び「社会福祉原論」の配布資料とするため私家版として翻訳したものです。原著の邦訳は、これが最初ではなく、私も訳者のひとりとして参加し、三友雅夫先生監訳により『社会福祉政策』として恒星社厚生閣から一九八一年に刊行されています。しかし，旧訳は昨今の学生の目にはやや難しく映るようですので、まったくの新訳としました。その際、原著が講義録であることから、実際にはこのように話されたのではないかと想像しつつ、話し言葉を採用しました。ティトマスの含蓄に富んだ話を、流れを止めることなく再現できたかどうかとなりますと、訳者の非力がめだちます。しかし、旧訳とはまた違った趣でその意義を再び新鮮なものとして受け止めていただければありがたいことです。誤りをご指摘いただければ幸いと存じます。

(1999.10, SS)